

氏名(本籍)	岡崎裕子 (大阪府)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博甲第331号
学位授与年月日	昭和61年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	ダウン症候群乳幼児における自己認知の萌芽に関する研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 小林重雄
副査	筑波大学助教授 教育学博士 井田範美
副査	筑波大学助教授 保健学博士 池田由紀江
副査	筑波大学教授 教育学博士 杉原一昭
副査	筑波大学教授 佐藤三郎

論文の要旨

本論文はダウン症候群児（以下ダウン症児と略す）の自己認知における乳幼児期の特性を検討したものであり、7つの実験・調査研究を含む6章で構成されている。

(1) 研究の目的

従来のダウン症児研究においては彼らの自己認知の形成を分析する視点が、極めて不十分であった。彼らは精神発達遅滞の中でも極めて早期の診断が可能であり、かえって乳幼児期の環境上の問題、すなわち親の育児様式の変化や応答性の欠如を生じさせることになる。その結果、乳幼児期の自己認知に深刻な問題が生じる可能性が考えられる。そこで、本論文ではダウン症児の乳幼児期における、後の自己概念を含む自己認知についての基盤の形成とその特性を検討することを目的とした。

(2) 方法および結果

第1章ではダウン症候群に関する研究の歴史的展望とダウン症児の特徴、および彼らを対象にした心理学的先行研究がまとめられた。そこで、彼らの乳幼児期の発達研究が非常に少ないことが示された。

第2章では、自己認知の発達を、主として乳幼児期について概観し、精神発達遅滞児における自己の対象化の問題に対するより体系的な研究の必要性を提起した。

自己認知の形成には、多くの能力がその基盤として必要と考えられる。第3章ではダウン症児の乳児期<研究1>と幼児期<研究2>の全般的な精神発達の特徴が、精神発達検査により検討された。

研究1では2か月から19か月までのダウン症児129名、研究2では15月から62か月までの201名についてのデータから、DQ、DA、領域別DAを算出し、各DA段階における通過率からみた項目分析が行われた。その結果、乳児期初期からDQ低下が認められ、加齢に伴いその低下は顕著となるが、3歳前後には比較的安定し、その後の個人差が拡大することが明らかにされた。一方、領域別の発達差は幼児期以降広がる傾向を示した。「言語」や「運動」での遅滞は大きく、自己認知への影響が推察された。また、自己認知を最も直接的に反映していると思われる「社会」でも、幼児期の対人認知領域に明らかな遅滞が示された。項目分析の結果でもダウン症児における自他の未分化性が示された。

第4章では、自他の分化過程に重要な意味をもつと思われる応答性の探知能力が検討された。探知の結果としての因果的作因の自己の発見は自己認知の基盤となるとされているものである。

<研究3>ではMA3～6か月のダウン症児6名とCA3～6か月の健常児12名を対象に、自己の身体の動きに応答的に刺激が動く条件(応答)、非応答的に動く条件(動き)、動かない条件(固定)に対する応答性の探知の指標行動が観察された。その結果、両群とも同様に自己の行為に応答的な条件において選択的に注視や身体活動を活発に示した。しかし、健常児では比較的早期に飽きが生じ、新奇な刺激に対して注視を示す傾向がみられたが、ダウン症児は飽きの証拠を示さなかった。MA統制による本実験でダウン症児の応答性の探知過程に乳児期早期からすでに遅滞を示したことはHunt(1969)の仮説する再認の段階が健常児より長く持続する可能性を示唆した。

<研究4>ではCA8～23か月のダウン症児12名と、CA8～20か月の健常児12名を対象とされた。座位でボタンスイッチに触れると遅延0秒で持続1秒の音と光の刺激が提示される3分間のフィードバック期と、それに続く何らのフィードバックもない2分間の無フィードバック期の計5分間における反応が観察された。その結果、ダウン症児ではCA10か月以上の者にしか反応増加がみられず、しかも、増加率も少なかった。無フィードバック期では両群の差がさらに明確になり、健常児では反応減少が明らかであったのに対し、ダウン症児では有意な減少が認められなかった。この結果は、健常児では本課題における同化がフィードバック期間に生じ、後半の無フィードバック期への対応がスムーズに進むのに対し、ダウン症児では自己の行為と結果の連合に時間を要し、結果に対する予期制が弱いことを示唆していた。子どもは、自他未分化な世界から、自己と外界の境界に気づき、応答性の探知を重ねることで因果的作因としての自己を発見すると考えられる。しかし、ダウン症児では探知に長い時間を要することから、同化の過程において刺激が消失したり、特性が変化してしまい、探知が中途半端な形で閉じてしまうことが多いと思われる。その結果、次なる探知への動機づけが弱まり、ますます因果的作因としての自己の発見に遅れを示す可能性が明らかにされた。

第5章では、ダウン症児における自己の対象化について3つの研究により検討された。

<研究5>ではMA14~37か月のダウン症児98名と、CA14~30か月の健常児63名が対象とされた。そして、身体部位を尋ねられた場合に、自己、母親、人形のそれぞれの位置を指さしてできるかについて調査された。その結果、ダウン症児は健常児より明らかに同定達成率が低だけでなく、手足のように直接自分で観察可能で対象化しやすい部位においても、他の部位より明らかに高い達成率を示さなかった。健常児は手足について先ず同定し、続いて顔面部、さらに自分では直接に観察不能であり、また動きもコントロールできない耳や髪といった順で達成しながら、身体的自己を発見していくことが示された。しかし、ダウン症児では部位間の差が明らかでなく、しかも全体的に同定達成率も低いことから、身体的自己の発見と身体部位の表象化の困難性が示唆された。

<研究6>では、MA18~30か月のダウン症児24名と、CA18~30か月の健常児24名が対象とされた。被験児のあごの部分に気付かれないよう口紅で印をつけた後、鏡の前での反応を分析し、あごの印に気付いて自発的にその部位に触れるなどの行動が観察された。その結果、ダウン症児にはあごへの接触はほとんど認められず、顔面の他の部位や鏡に触れるなどのランダムな行動を示した。ダウン症児の18、24か月では、鏡接触や身体動揺など鏡像を完全に非実在と把握していない段階にある者が多くみられた。従って彼らには自己と鏡像との関連を探索する見比べや、表象の形成を思わせる指さしなどは、ほとんど生じていなかった。年長(30か月)になり鏡像を自己に同一視できるようになっても、正確にあごに触れる者は少なく、自分の顔の表象が十分でないためにあいまいな自己像しか有していないのではないかと考えられた。

<研究7>では、MA18~30か月のダウン症児27名と、CA18~30か月の健常児30名が対象とされた。刺激には、自分の母親と成人女性2名の計3枚、および自分と同年代の男女児2名の計3枚、合計2セットのポラロイド写真が用いられた。課題は、各試行において3枚の写真から「○○ちゃん(あるいはお母さん)はどれかな?」という質問に対して、対応する写真を指さしなどで示すことであった。健常児では、自己の写真の方が母親のものより若干達成困難ではあったが、18か月では約半数が可能となり、24、30か月ではほぼ完全に可能となっていた。一方、ダウン症児も母親認知が先行する点では同じ過程を示していたが、18、24か月ではほとんど不可能であり、30か月でようやく半数が可能となった。写真像の認知は、当然顔についての表象が必要であり、さらにより微細で正確な特徴を有する自己像の形成が条件と考えられた。しかし、写真課題における顕著な遅滞は、ダウン症乳幼児が自己を対象化した後、その特徴を抽出して具体的かつ正確な自己像を形成することについての著しい困難性を示唆した。

以上を総合した結果、ダウン症児は乳児期初期から自己認知の基盤をなす多くの関連領域に遅滞を示し、応答性の探知に問題を有する結果、自他の分化が遅れることが明らかにされた。さらに、幼児期には、自己を対象化し、その微細な特徴を抽出、表象することに極めて強い困難性を示すことも明らかにされた。本研究により、ダウン症児の乳幼児期における自己認知の形成に深刻な遅滞を示すことが明らかとされたが、それに対応して、超早期教育における目標として「自己」育成の観点が導入されることが要請されよう。

審 査 の 要 旨

ダウン症候群児，とくに乳幼児期にある子どもを対象として研究が進められている。近年，世界の動向として早期に確定診断が下されるダウン症児についての超早期教育への関心が高まっている。アメリカでの有力な超早期教育研究は行動論的なプログラム学習が中心となっている。一方，本邦における超早期教育研究は独自の方向を模索している状況である。そこでは，基礎的研究が不十分のまま，試行錯誤的に実践的方向に流されている傾向があり，基礎資料の整備は急を要している。

そうした状況で，多数のダウン症児の全般的な発達特性を明らかにし，更に自己認知の初期形成の特徴といった認知心理学的側面からの貴重な資料を本研究が提供したことは注目に値するものである。

方法論的に原資料の収集に厳密性が欠けること，特殊教育領域の問題点となっているMAマッチング法に何ら新しい工夫を加えていないこと，また考察として，後の自己概念形成と今回の研究がどうつながるかなどは不明であり，かならずしも十分といえないところも残る。

しかしながら，年少児とくに心身障害乳幼児を被験者として研究し，苦心して資料を収集してきたこと，そして，彼らについての超早期教育に向けての基礎的な貴重な資料を提供したことなどダウン症候群研究にとって貢献が大であると判断される。

よって，著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。